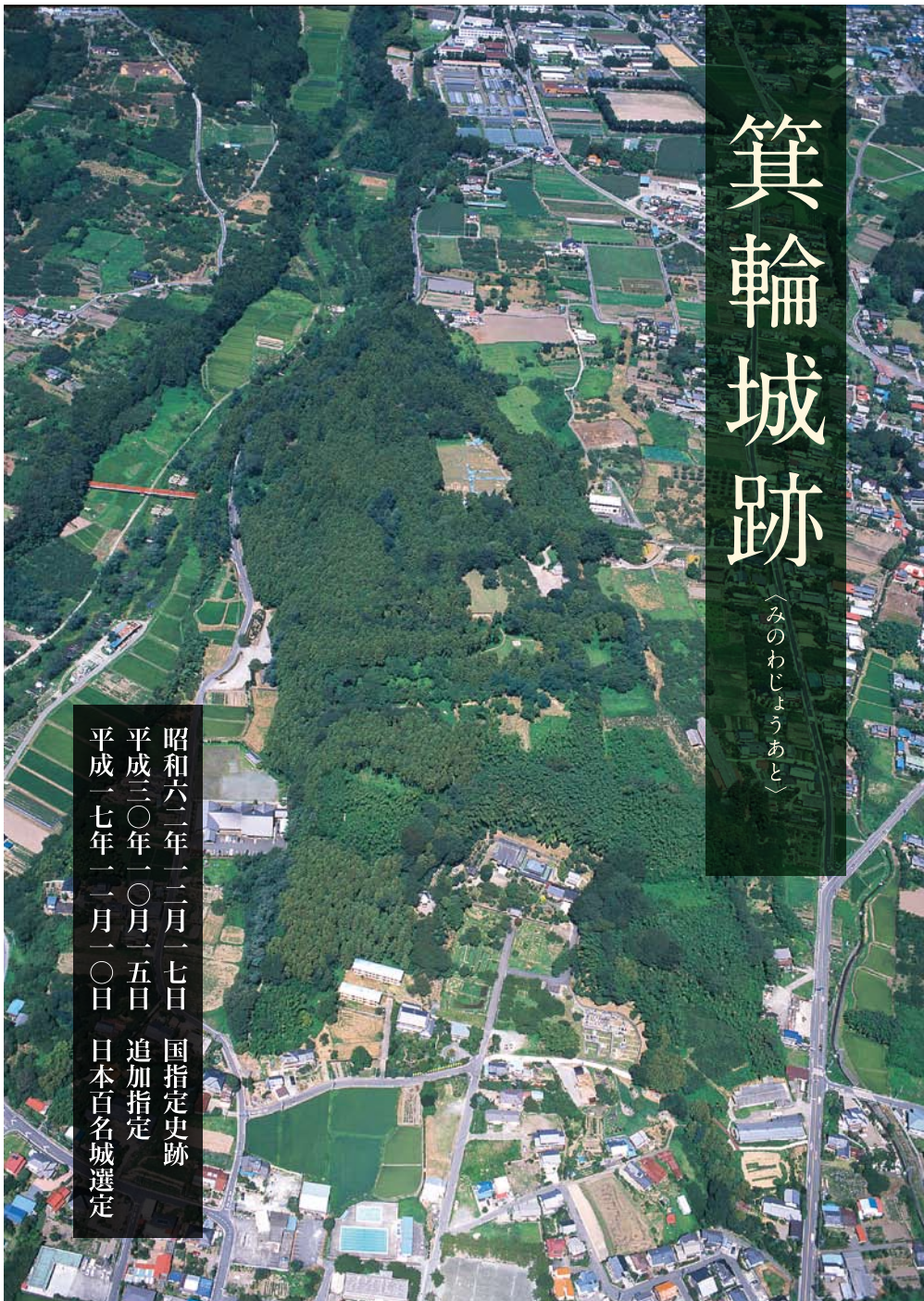




箕輪城跡

(みのわじょうあと)

昭和六二年二月七日
平成三〇年一月二五日
平成一七年二月一〇日
国指定史跡
追加指定
日本百名城選定

箕輪城跡は榛名山の東南麓に広がる独立丘陵上の中心部に位置します。城の西側を流れる榛名白川や城の南側に存在した椿名沼と呼ばれる湿地帯など自然の地形を巧みに利用した構造になっています。城内で標高の最も高い二八〇mほどの置置山から御前曲輪、本丸、二の丸、郭馬出という尾根上の曲輪を城の中心軸として、線対称的に多くの曲輪を丘陵上に配している他、新曲輪、内宿などの平城部を一部含んだ平山城です。城域面積約三六haと戦国時代の上野国において屈指の規模を誇る城郭でした。昭和六二年に群馬県の戦国時代を代表する城郭跡として国史跡に指定されました(現在の史跡指定面積は約二二ha。高崎市では平成一〇〜一八年度まで、本丸・二の丸・三の丸・郭馬出など城中枢部を中心に約七〇〇〇㎡を発掘調査しました。この調査は箕輪城跡を史跡公園として活用するための基礎資料収集を目的として行いました。その結果、最後の井伊直政期を中心に門跡、石垣、石組の排水溝、土塁、堀、掘立柱建物跡が見つっています。特に堀の規模と虎口(出入り口)周囲の残りのよさが特徴であり、そうした特徴をいかした史跡の環境整備・遺構整備を平成三三年度から実施しています。なお、箕輪城跡は平成一七年に「日本名城(日本城郭協会認定)」に選定されています。



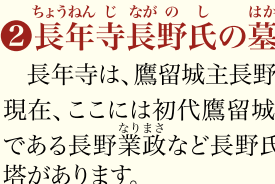
箕輪城跡整備イメージ図

箕輪城に関連する文化財



①鷹留城跡〈高崎市指定史跡〉(下室田町3238ほか)

鷹留城跡は明応年間(1492〜1500)頃に長野氏によって築城され、永禄9(1566)年に武田信玄との戦いで落城するまでの間、長野氏の居城として構えられました。城跡は南北約430m、東西約200mあり、山城としては県内でも有数の大きさです。また、堀跡などの各種遺構が良好に残っています。



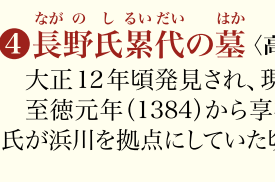
②長年寺長野氏の墓〈高崎市指定史跡〉(下室田町1380)

長年寺は、鷹留城主長野氏の菩提寺として知られています。現在、ここには初代鷹留城主の長野業尚をはじめ箕輪城主である長野業政など長野氏累代7人を供養するための五輪塔があります。



③北新波砦址〈群馬県指定史跡〉(北新波町210ほか)

箕輪城主の長野氏に關係する武士の拠点の一つと想定されています。堀と土塁で囲われた郭は、ほぼ正方形で75m四方の規模になります。高崎市教育委員会が平成3〜4年度に史跡公園として整備し、現在は一般公開されています。

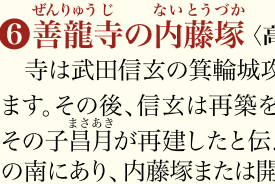


④長野氏累代の墓〈高崎市指定史跡〉(浜川町978)

大正12年頃発見され、現在地に整理し安置したものです。至徳元年(1384)から享禄元年(1528)の銘があり、長野氏が浜川を拠点にしていた頃の石塔になります。



⑤伝箕輪城主長野業盛之墓〈高崎市指定史跡〉(井出町1237)
永禄9(1566)年に箕輪城は落城し、城主長野業盛は自害したといわれています。江戸時代の書物『箕輪軍記』では、自害した業盛を哀れんだ僧が遺体をもらいうけ、井出の地に葬ったとされています。

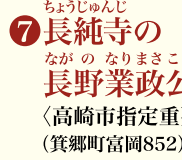


⑥善龍寺の内藤塚〈高崎市指定史跡〉(箕郷町生原1430)

寺は武田信玄の箕輪城攻略の際、炎上したと伝えられています。その後、信玄は再築を配下の内藤昌秀(昌豊)に命じ、その子昌月が再建したと伝えられています。父子の五輪塔は寺の南にあり、内藤塚または開基塚と呼ばれています。



広域図



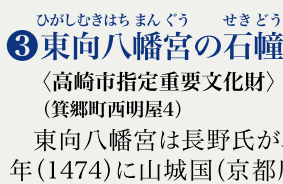
⑦長純寺の ながの なるまさこう 長野業政公の像 〈高崎市指定重要文化財〉 (箕郷町富岡852)

長純寺は、長野氏の開基による菩提寺です。高さ約35cmの業政の木像は開基堂に安置されています。



⑧高崎城址(三の丸外圍の土居と堀)

慶長3(1598)年、井伊直政はかつて和田城があった地に新たに高崎城を築き、箕輪城を移しました。しかし、直政は在城3年で佐和山(滋賀県)へ移り、その後、短い期間に城主が何人も入れ替わりました。元和5(1619)年に安藤重信が5万6600石で入城し、安藤氏が3代77年間にわたり城主を務め、高崎城を完成したといわれています。現在では、乾櫓、東門、三の丸の堀と土塁がわずかに昔の面影をとどめています。



③東向八幡宮の石幢

東向八幡宮は長野氏が、文明6年(1474)に山城国(京都府)石清水八幡宮より勧請創建し、箕輪城総鎮守として祀られたと伝わっています。本殿北側に石幢(文明6年銘)があります。



④旧下田邸書院及び庭園

旧下田邸書院及び庭園は、長野氏の重臣であった下田大膳正勝の子孫が落城後この地に土着し、代官として居を構えた屋敷跡です。かつて3町歩にも及んだとされる広大な敷地にあった建物のうち、江戸時代の書院が残り、庭園とともに貴重な近世の様式を今に伝えています。



本丸周辺の変遷

本丸周辺では発掘調査によって、縄張が大きく変遷していることがわかりました。

1期―長野氏・武田氏時代の頃

現本丸南東側と北西側に堀(1号堀・2号堀)があった時期

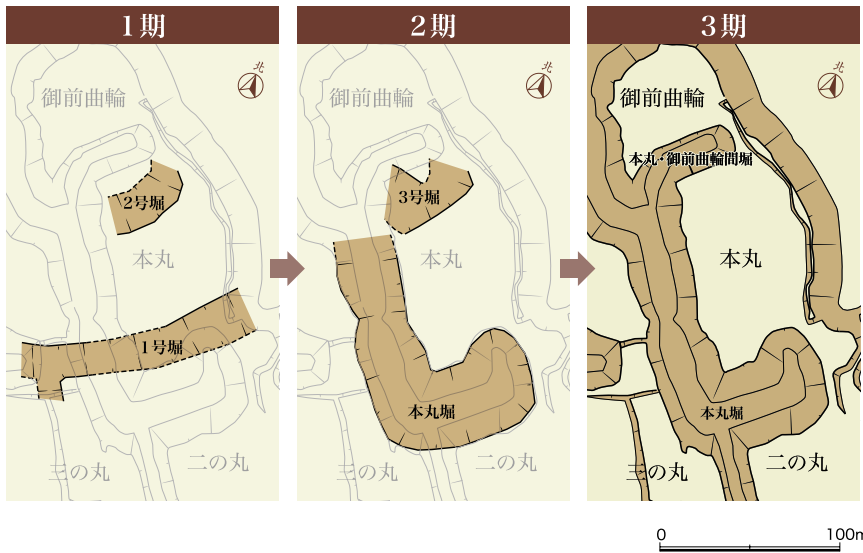
2期―北条氏時代を中心とした時期

本丸堀と呼ばれている本丸の南東側から西側を巡る堀が掘られ、2号堀が埋められ、新たに3号堀が掘られた時期

3期―徳川氏時代を中心とした時期

3号堀が埋められ、本丸と御前曲輪間の堀が掘られた時期

以上のことから、現在見える縄張は、最後の徳川氏時代のものであり、長野氏時代に比べて大きく造り替えられていることがわかっています。



出土品

発掘調査の出土遺物の大部分は土器になります。特に、使い捨ての器として主に宴会などで用いられた素焼きの皿である「かわらけ」は大量に出土しています。さらに、かわらけの中には北条氏の本拠である小田原からもたらされた「手づくねかわらけ」が6点含まれ、北条氏が城主だった時代における小田原との関わりが想定されます。

その他、主に中国から輸入された陶磁器や瀬戸美濃地方(愛知・岐阜県)で焼かれた陶器などは、県内の城館跡の中では随一の出土量を誇ります。関ヶ原の戦い以前の城郭では関東で初となる楽茶碗(茶の湯に用いる軟質施釉陶器)も出土しており、箕輪城での生活を偲ぶことができます。

戦乱を物語る遺物として、鉄鏃や鉄砲玉なども出土しています。そのほか、硯、石塔、銭などの豊富な出土遺物は当時の武士の生活や文化を知る大きな手がかりとなります。



本丸から出土したかわらけ

中国から輸入された磁器

小田原からもたらされた手づくねかわらけ

鉄鏃、鉄砲玉、鉄砲部品、刀子、筭、銭

楽茶碗

硯に描かれた武士の絵

各所に残る遺構

箕輪城は城主の交代などを契機にして、幾度も造り替えがなされています。そのため、現在の箕輪城跡は長野氏時代の城とはかなり異なっていて、最後の井伊直政在城当時の姿に最も近いと考えられます。



堀

本丸を巡る幅三〇㍍、深さ一〇㍍の空堀や、城の中央部を南北に分断する役割がある大堀切など、同時代の城としては全国的な規模を誇る堀が城内各所に残っています。一部の堀では部分的な試掘調査を行っています。六m以上埋まっていることがわかり、石垣なども発見されています。当時の堀は現況のおよそ二倍程度の深さで、一部では石垣などが使われていたようです。

① 本丸南堀



石垣

大手門から、本丸へ上がっていくルートにあたる虎鞆門・鍛冶曲輪・三の丸・二の丸などには石垣が残っています。その他、郭馬出・御前曲輪西側の堀などにも石垣があります。発掘調査をすると、多くの場所、埋まっていた石垣が発見され、城の主要部のかなりの場所、石垣が使われていたと考えられます。これらの石垣は野面積みと呼ばれる加工をしない河原石を用いたもので、一人では運べない径一mほどの石が使われています。箕輪城内では石が取れないため、城のすぐ西を流れる榛名白川から運び上げたのでしょう。石垣が使われたのは、発掘調査などから、主に城の最終時期と考えられますが、一部の石垣はさらにその前の時代まで遡ります。

① 虎鞆門の石垣



② 鍛冶曲輪の石垣



③ 御前曲輪西堀の石垣



■見学コース案内

城跡には7か所の入口があり、いずれも中央の見学コースに接続しています。

●各入口から中央コースまでの距離と所要時間、見所			
大手虎鞆門口	270m	10分	三の丸など城内で最も石垣が集中しているルートです。
大手尾根口	470m	15分	長野氏時代の大手ルートといわれています。
観音様口	400m	13分	観音様の石段を登ります。春の桜が見事です。
椿名口	620m	17分	なだらかな尾根道で、一部に椿があります。
搦手口	260m	5分	城の主要部へのアプローチが最も容易なルートです。
霊置山口	200m	4分	搦手口と同様に城の主要部へのアクセスのよいルートです。
大堀切口	220m	7分	虎鞆門駐車場から郭馬出西虎口へ一気に向かえます。

●中央コースの距離と所要時間、見所			
中央コース	800m	20分	御前曲輪・本丸・二の丸と、これらの曲輪周囲の巨大な堀が見られます。

箕輪城の発掘調査

これまでに行ってきた発掘調査の結果について主なものを紹介します。

① 三の丸の石垣

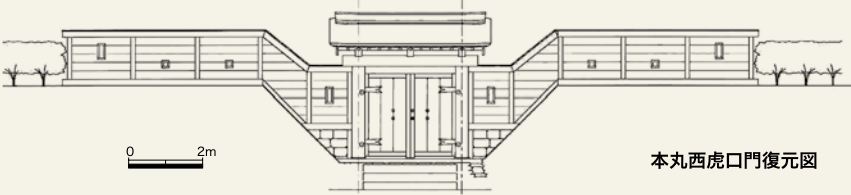
城内では最も高い四・一mの石垣を確認しました。関東地方では江戸時代に入ると、江戸城など一部の城郭で四mを超えるような高石垣が用いられていますが、それ以前では豊臣秀吉が築いた石垣山城（神奈川県小田原市）など限られた城でしか確認されていません。箕輪城が北関東の要の城にふさわしい形で改修されたことがこの石垣からうかがえます。

② 三の丸の下層の石垣

①の下層で確認された古い時期の石垣で、大堀切に平行して積まれています。最高一・三mほどの高さで、一人で運べるくらいの石を用いるなど、城最終時期の石垣と比較すると大きな相違があります。同様な特徴を持つ石垣が、北条氏邦が城主を兼任していた鉢形城跡（埼玉県寄居町）でも見つかっています。

③ 本丸西虎口

蔵屋敷から本丸に架かっていたと推測される木橋を渡った所で、幅二・九四m、奥行一・五四mの門跡を確認しました。礎石は全部で四石あり、その配置から一階建ての高麗門と推測されます。本丸に入る三か所の虎口のうち、唯一木橋を渡ってはいれる虎口で、間口（扉部分の幅）については本丸の中で最大です。全国に現存する城門や城絵図を分析し、下図のように考証されました。令和四年度から、この門の復元工事を進めています。



④ 郭馬出西虎口

大堀切に唯一ある土橋を、二の丸から南に渡ると五二m×二七mの曲輪があります。南側に出撃する拠点の役割があり、郭馬出と呼ばれています。平成二四年度に発掘調査し、西側の虎口で幅五・七三m、奥行三・四八mの門跡を確認しました。礎石の配置から二階建ての櫓門と推測され、関ヶ原の戦（一六〇〇年）以前では、確認されている中で関東地方最大規模の門跡になります。門の柱を据える礎石は全部で八石あり、屋根から落ちる雨水を受けるための排水用の溝も極めて良好に残っていました。平成二八年二月には復元工事が完成しました。



箕輪城の歴史

西暦五〇〇年前後に長野氏が築城しました。後の系図によると、業尚、憲業、業政、業盛の四代が箕輪城を本拠にしていたと考えられています。ただし、近年の研究では、方業→業正（業政）→氏業（業盛）と変遷したことが指摘されています。また、業尚や憲業は鷹留城（高崎市下室田町）を築城した長野氏一族ではないかという指摘もなされています。

長野氏は武田氏の西上野侵攻に際して、この箕輪城

を本拠にして最後まで抵抗しましたが、永禄九年（一五六八）に難攻不落だった箕輪城もついに武田信玄に落とされました。その後は、武田氏、織田氏、北条氏、徳川氏といった戦国大名の拠点として、各大名の有力家臣が配置されました。特に最後の城主井伊直政は、徳川家康の家臣の中で最大石高の二万石で封じられています。その八年後の慶長三年（一五九八）、井伊直政は城を高崎に移し、箕輪城は廃城になりました。

※榛名町誌刊行委員会「榛名町誌 通史編上巻（二〇一一）

年代	箕輪城主	主な出来事
1454年 (享徳3) ~ 1482年 (文明14)		享徳の乱で関東地方が戦国時代へ。
1500年頃		この頃、箕輪城築城。
1524年 (大永4)		箕輪の長野方業が総社城主長尾顕景を攻める。この年までに箕輪城は築城されている。
1552年 (天文21)		関東管領上杉憲政、北条氏に攻められ、平井城（藤岡市）を追われる。
1560年 (永禄3)		桶狭間の戦い（織田信長、今川義元を破る。）
1561年 (永禄4)		この頃から、武田信玄が西上野に出兵する。
1566年 (永禄9)		武田信玄、箕輪城を落とす。
1573年 (天正元)		室町幕府滅亡（信長、足利義昭を追放する。）
1575年 (天正3)		長篠の戦い（信長・徳川家康が、武田勝頼を破る。）
1582年 (天正10)		信長重臣の滝川一益が箕輪に入城するが、間もなく北条氏邦が城主に。
1585年 (天正13)		信長、武田氏を滅ぼす。本能寺の変（信長死す。）
1590年 (天正18)		豊臣秀吉、四国平定。秀吉、関白に。
1598年 (慶長3)		家康家臣中最高石高の12万石で、井伊直政が箕輪城主に。
1598年 (慶長3)		秀吉、北条氏を滅ぼし、天下統一。
1598年 (慶長3)		直政、城を高崎に移し、箕輪城は廃城に。秀吉死去。



⑤ 御前曲輪西虎口

通仲曲輪から御前曲輪へ渡った場所の虎口部分で門跡を確認しました。礎石は全部で六石あり、その配置から主柱二本を前後四本の控柱で支える四脚門と推測されます。幅二・二m、奥行二・二mの規模になります。門の屋根から落ちる雨水を受けるための溝には一五六個の石塔の部材が用いられています。

⑥ 大堀切土橋付近の石垣

箕輪城を南北に分断する堀で、堀の南側が落とされても城の主要部の北側を守ることができる役割を果たしています。この堀を唯一渡ることができる土橋の基底部では土留めの役割を果たす石垣を確認しました。



⑦ 大堀切西端付近の石垣

堀に直交し砂防ダムのような役割などがある石垣が堀底付近で確認されました。この調査部分では七・五m以上堀が埋まっているのがわかっています。

